



TITLE:

# 京大東アジアセンターニューズレター 第334号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

---

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第334号. 京大東アジアセンターニューズレター 2010, 334

ISSUE DATE:

2010-09-13

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/125133>

RIGHT:

(旧・「京大上海センターニュースレター」)

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

2010 年 9 月 13 日

## 目次

- 中国自動車シンポジウム: 中国自動車市場のボリュームゾーンを探る
- 河北省承德市＝歴史的・人工的多民族融和都市
- 最近の中国の奇病など
- 中国青年代表団経済班との交流会に関する報告
- 【中国経済最新統計】(試行版)

主催

京都大学東アジア経済研究センター

共催

東京大学ものづくり経営研究センター

東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点

京都大学人文科学研究所付属現代中国研究センター

後援

京都大学東アジア経済研究センター協力会

## 中国自動車シンポジウム

# 中国自動車市場のボリュームゾーンを探る

——小型車・低価格車セグメントにおける代替・競争構造——

2010 年 11 月 6 日(土) 13 時

京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホール

総合司会 京都大学大学院経済学研究科教授 梶山 泰生

13:00-13:10

挨拶 京都大学大学院経済学研究科長 田中秀夫

東京大学ものづくり経営研究センター ディレクター 新宅純二郎

13:10-13:50

京都大学大学院経済学研究科 教授 塩地 洋

新興国における小型車・低価格車セグメントの構造  
——全体テーマと報告構成——

## 第 1 部 非自動車セグメントのボリューム

13:50-14:20

エイムス ディレクター

菊地 捷

低速電気自動車の車体構造と普及の見通し

14:20-14:50

東京大学社会科学研究所 教授

田島 俊雄

「汽車下郷」と中国的農用車・微型車の命運  
——日本の「軽自動車」の再検討——

14:50-15:20

## 第2部 日中韓自動車メーカーのマーケティング戦略

15:30-16:00

明治大学国際日本学部 准教授

呉 在恒

現代自動車の現地適応戦略  
—エラントラが売れる理由—

16:00-16:30

東京大学ものづくりセンター 助教

李 澤建

奇瑞汽車のマーケティング戦略

16:30-17:00

日産自動車中国事業部 部長

西林 隆

日産自動車の中国事業戦略

17:00-17:05

閉会

17:20-19:30

懇親会（参加費無料） 於カンフォーラ

司会 京都大学東アジア経済研究センター協定会 理事 宇野輝

開会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター長 劉徳強

閉会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター協定会 副会長 大森経徳

\*\*\*\*\*

## 河北省承德市＝歴史的・人工的多民族融和都市

03. SEP. 10

中小企業家同友会上海倶楽部代表

東アジアセンター外部研究員（協定会理事） 小島正憲

## 1. 承德市と香妃。

晩餐会の席上、承德市政府幹部が、「承德には、ウイグル族の香妃も乾隆帝といっしょに、たびたび遊びに来た。乾隆帝は香妃のために廟も建てた」と誇らしげに語った。それを聞いて私は反射的に手を上げ、「私は3か月前にカシュガルに行ったが、彼の地では香妃は北京に着くと同時に自殺したと語り継がれているし、香妃墓には遺体をカシュガルまで運んだ棺車まで展示してある。もし香妃がこの承德で楽しく過ごしていたという証拠があるのならば、それはもっと大きく宣伝すべきである」と発言した。すぐに団長の大西広教授も、「もしそれが本当だとすれば、歴史的に貴重な事実であり、承德市は積極的に取り上げるべきだ」とたたみかけて発言された。それを受けて市政府幹部はたじろぐ様子も見せず「たいへんよい提案を受けたので、現在建設中の博物館が完成したら、その旨を明示する」と言っ

てのけた。

晩餐会終了後、私は市の外事弁公室の担当者に、「明日、ぜひその廟に連れて行ってください」と頼み込んだ。彼女は少し困ったような顔をしながら、「明日は時間に余裕がないので行けません」と言った。私が「どうしてもその廟を見てみたい」と食い下がると、今度は「イリ廟には道路事情が悪くて行けません」とはっきり断ってきた。私は彼女のその答えから、廟の名前がイリ廟であるということを知ったが、同時に大きな疑問を持った。なぜなら同じ新疆ウイグル族地域でもカシュガルとイリとはかなり離れており、香妃はイリとは無関係であったからである。そこまで考えたとき私は、市政府幹部の話が「作り話」ではないかと思った。そして上級幹部のその「作り話」がばれるのを防ぐために、部下の担当者が必死で私がそこに行くのを阻んでいるのではないかと考えた。私はその健気な気持ちを汲んで、それ以上追及せず、この件についてはあらためて独自に調査をすることにした。

8月10日から22日まで、私は大西広教授を団長とするチベット調査団に加わり、2年ぶりにラサに入ることにした。上記はまずその予備調査として、承德市にある小ポタラ宮を訪ねた日（8/12）の晩餐会でのやり取りである。私はチベットから帰京後（8/28）、単身で再度、ことの真偽を確かめるため承德市に入った。事前にネット上で、承德市について検索していたところ、「熱河古蹟と西藏藝術」（五十嵐牧太著、昭和17年洪洋社刊、昭和57年復刻、第一書房刊）という本が目飛び込んできた。さっそく取り寄せて読んでみたところ、それは満州国時代の熱河省承德市の調査記録であった。そこには戦前の承德市の実情が、多くの写真や図面を用いて詳しく描かれていた。私はその本をすみずみまで読んだが、香妃のことは1行も出てこなかった。それでも私はその本を片手に、承德市をくまなく歩くこ



とにした。

承德市は北京から高速道路を北東に走ること2時間半、万里の長城外の位置にある。清朝の時代、康熙帝が避暑のためにそこに別荘を建て始め、乾隆帝がそれを拡充し、やがてはそこで政務も行うようになり、いわば副都のようになった場所である。市の中心部にその名も「避暑山荘」という豪勢な一大公園がある。五十嵐氏によれば、その昔、この一角に温泉が湧出していたことから、ここを「熱河」と称し、満州国時代にはこの地域を「熱河省」と呼んでいたという。以前から私は、南方でもないのになぜこの地域が「熱河省」と呼ばれるのか不思議であったが、これでそのなぞが解けた。今も、この「避暑山荘」の裏口近くに、「熱河」と刻まれた石碑が建っている。五十嵐氏の本の中にもその石碑の写真はあるが、現在のもは裏に1957年製と刻まれており、代替わりしているようであった。



康熙帝は、「朕は万里の長城は築かない。民族融和を実現し、万里の長城を無用物にする」と言い、この「避暑山荘」の周囲に、多くの廟や寺院を建て、そこに多民族を居住させ、民族融和の村を実現しようとしたという。乾隆帝もこれに続き、満族・蒙古族・チベット族・回族・ウイグル族などの壮大な寺院を次々と建立した。後にそれは「外八廟」と呼ばれることになった。その寺院群の中に、ラサのポタラ宮に似せて乾隆帝が作った「普陀宗乘之廟」(小ポタラ宮)がある。

「外八廟」と称されてはいるが、実際には12か所の寺院があった。五十嵐氏の調査では11か所とされており、そこには広縁寺が含まれていない。なぜ「外八廟」と称されているかについても、清朝の時代の寺院管理区分が8か所であったという説、12か所の中で建築様式にラマ教の影響が濃厚であるのが8か所であったという説、単純に大きな寺院が8か所であったという説などがある。私は12か所の寺院の全部をじっくり見てまわったが、すでに朽ち果てている寺院が数か所あり、それらは戦前の軍閥時代に荒らされた結果であり、日本軍が仏像などを盗んだり、文革期に多くの財宝が運び去られ、破壊された結果の姿でもあった。また現在は人民解放軍の療養所の中にあって確認できない寺院などもあった。それら12か所の寺院の、私の調査については、五十嵐氏の調査などと比較しながら、別項2、に記しておく。

それでも現在、多くの寺院が、現中国政府の手によって、立派に再建されつつある。ことに現在、「外八廟」周辺の広大な地域の環境整備が大々的に行われており、個人住宅などがほとんど取り壊され、1年後には緑地化され、一大観光地化されるという。中国政府は、承德市を歴史的・人工的各民族融和都市つまり和諧社会のモデル地域として売り出そうとしているようである。現在、承德市の人口は340万人ほどで、その中に満族・モンゴル族・回族・朝鮮族などの少数民族約130万人が漢族と同居しており、3か所の少数民族自治県もある。

確かに「外八廟」の中には、「安遠廟」(通称イリ廟)と呼ばれる寺院があり、それは新疆ウイグル自治区イリ地方の寺院「固爾扎廟」に似せて作られており、そこにウイグル族が移住してきたという。私はその廟内をくまなく探しまわったが、予想通り香妃のことはどこにも書いてなかった。またその他に「外八廟」には、乾隆帝がパンチェン・ラマ6世のために、チベット自治区シガツェのタシルンポ寺を真似て作ったという「須弥福寿之廟」という寺院もある。さらに西方諸部族の帰順を記念し、各部族の融合を願って建てた「普樂寺」もある。これらを見ていると、清朝の最盛期とされている康熙・雍正・乾隆の3皇帝の時期でさえも、皇帝たちは民族融和に腐心していたということがよくわかる。

五十嵐氏も上掲著で、清朝の皇帝たちのその胸のうちの、「清朝としては、蒙古よりさらに深く西藏を懐柔しなければならぬのであり、蒙古、西藏を敵としたのでは清朝は不安に堪へぬのである。清朝が中原の文化に酔って油断して居れば、反覆常なき蒙古、西藏などが背後から起こって清朝を壊滅してしまふかもしれないのであった。それが為に清朝の政策としてはどうしても、蒙古、西藏と提携しなければならないのであって、これを行ふには宗教に依るがよいと考へたので、蒙古、西藏のほとんど狂信しているところのラマ教を崇敬しかつ保護して行ふべきことが思ひつかれたのであろう。康熙帝は即位16年、長城以外の蒙古の地を巡遊して、適当な足溜まり即ち別荘を造らうと考へたのである。そしてその地が物色された結果として今の承德が選定されたのである」と、書いている。

私は足を棒にして「外八廟」を回って香妃の足跡を探したが、結局それはどこにも見当たらなかった。そしてやはりあの市政府幹部は「作り話」をしたのだとほぼ断定した。最後に私は、「避暑山荘」の中の博物館で参考資料を買い求めホテルに戻った。深夜、なかなか寝付けなかったのも、ベッドに寝転びながら先刻買ってきた参考資料に目を通して見た。その中の1冊で、「承德寺廟概覧」という本に、承德市には「外八廟」以外に100か所以上の寺廟があったと書かれており、それらが詳しく紹介されていた。それらを読み進めていくと、その最後のページにイスラム寺院のことが書いてあり、そこに香妃の字が躍っていた。

私はベッドの上に座り直し、そこを真剣に読んだ。承德市には3か所のイスラム寺院があり、康熙帝が「避暑山荘」を造り始めてから、この地に人夫などとして動員されてきた者たちの中にはイスラム教徒も多く、それらのために東清真寺が建てられ、乾隆帝の時代には西清真寺も建てられたと書かれていた。

そして香妃は両寺によく訪ね、さまざまな寄進をしたという。残念ながら、東清真寺は当時の建物ではなく、まったく新しいモスクになってしまっているが、西清真寺の建物は当時の面影を残しており、そこには香妃が寄進





したといわれる提燈があると書いてあった。3か所目のイスラム寺院は市内から30分ほど離れた場所にあり、香妃とは関係がないようであった。

私は翌日、帰国便を遅らせて、この寺院を探し回った。両寺は観光地ではないため、ガイドも運転手もその所在地がまったく分からず、その上、朝のラッシュや朝市と重なって車が遅々として進まず、いらいらするばかりであった。やっとの思いで東清真寺にたどりつくことができたが、やはりそこには何も歴史的なものは残っていなかった。次いで探し当てた西清真寺ではイマーム風の老人が、異教徒の私を寺院の中まで案内してくれ、「これが香妃の寄進した提燈だ」と教えてくれた。私がしげしげと見ながら写真を撮っていると、彼は「残念ながらこれは本物ではない。本物は文革のときに壊されてしまったので、私が忠実に再現したものだ」と話してくれた。私は彼のその言葉を信じ、じっとその提燈を見続け、同時にあの市政府幹部の顔を思い浮かべながら、「あの話は本当だったのだ」と思い、自分の早とちりを恥ずかしく思った。そしてこの提燈を、その再レプリカでよいかから博物館に飾り、その由来を明示し、民族融和を謳いあげべきだと考えた。

もちろんカシュガルの人たちが、その香妃は偽者であると強弁することもできる。しかし文献上では香妃は北京で天寿を全うし、清の歴代皇帝が眠る東陵に葬られているという。私はできるだけ早い機会に東陵に行って、それを確認してみたいと思っているが、そこまでしなくてもどうやら香妃論争は、この西清真寺の提燈という物証の出現で、北京側に軍配を上げることができそうである。

## 2. 「外八廟」紹介。 寺廟の紹介は創建年代順。

### ①溥仁寺 1713年(康熙52年)創建。



- ・康熙帝の時期に創建された現存する唯一の寺院。前寺と呼ばれていた。
- ・康熙帝の60歳(満寿)を祝うために、帰順した蒙古族一

統が廟宇建立を願い出たので、康熙帝がこの地を定めた。

- ・建物は漢族様式で、質素。細部にラマ教的手法。蒙古族の負担の軽減のための康熙帝の配慮と見られている。
- ・現在、修復中のため、拝観できず。
- ・五十嵐本には、「荒廃何れも甚だしく全く手の降し様もなく」との記述。

### ②溥善寺 1712年(康熙51年)創建？

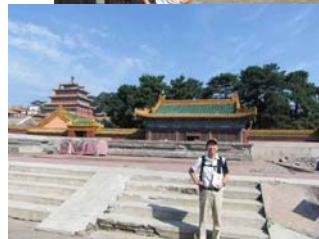
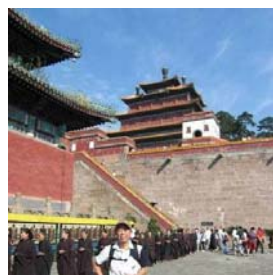
- ・建物は漢族様式で、質素。細部にはチベット様式が見られたという。
- ・溥仁寺と相前後して建立とされているが、1920年代に軍閥によって破壊され、現在、何もその痕跡は残っていない。私営の工場用地の中に、枯れた松の大木があり、そこがこの寺院の所在地とされている。後寺と呼ばれていた。
- ・五十嵐本にも、「今は各宇倒壊、僅かに東西配殿を残すのみで、廢墟に等しい」との記述。

### ③普寧寺 1755年(乾隆20年)創建。

- ・総面積33,000平方mの気宇壮大、壮麗豪華な寺院であり、俗に大仏寺と呼ばれている。
- ・1755年、乾隆帝はジュンガル部ダワジ汗の反乱を平定。10月、蒙古4部族の代表が乾隆帝に謁見のため承德を訪問。乾隆帝はそれを記念して、壮麗な普寧寺を建立。その名には、「天の下、普(あまねく)、永遠の安寧を」との願いが込められているという。
- ・漢様式とチベット様式を融合させた建造物であり、乾隆帝の民族融合の苦心作とも思われる。
- ・寺院内の後部にある「大乘之閣」の中には、高さ23mほどの金漆・木彫の千手千眼観世音菩薩が安置されている。木造仏像としては世界最大のものであり、乾隆時代の傑作とされており、一見の価値あり。
- ・現在、中国北方最大のチベット仏教の活動拠点となっている。寺院内に多くのマニ車がつらえてある。
- ・五十嵐本では、「乾隆25年5月、ジュンガル地方の平定を記念して建立」と記述。

### ④普祐寺 1760年(乾隆25年)創建。

- ・普寧寺の一角に建っている。現在、一部の建造物が修復中。純然たる漢族様式。
- ・戦前に、日本軍が「羅漢堂」から、五百羅漢をこの寺院に移設したという。しかし普祐寺に現存する羅漢は175体。



・寺院内には、チベット仏教ゲルク派の開祖ツォンカパと、その両側にダライ、パンチェンの両高弟が祀られている。

#### ⑤安遠廟 1764年(乾隆29年)創建。

- ・新疆イリ地方のアムルサナの反乱を打ち破ったダシタワ部の部族が、清朝に帰順し移住してきたので、乾隆帝がその遠来の部族の安寧を祈念し、イリ河畔の「固爾扎廟」に似せてこの寺院を建立した。俗にイリ廟と称す。
- ・安遠廟の名前には、遠方を安定させ、辺境の各民族をまとめ、北方の守りを固め、国家の統一を維持するという意味が込められている。
- ・総面積26,000平方mの壮大な廟。現在、一部の建造物が修理中。寺院内には香妃に関する掲示はまったくなし。なお五十嵐本にも、香妃の記述は一切なし。五十嵐本では、「大体の形式は漢族様式であるが、チベット式の相当に加味された普度殿と呼ぶすこぶる異彩を放つ魁偉な建物がある」と記述。
- ・「承德寺廟概覧」には、伝説と断った上で、「乾隆帝が香妃のホームシックを和らげるために、毎年承徳の避暑山荘に誘ったがそれでも香妃の憂いが晴れないため、この地にイリ河畔の固爾扎廟に似せて廟を建てた。そして避暑山荘内に香妃のために“暢遠楼”を建てた。香妃はその楼から安遠廟をながめて心を慰めた」との記述あり。ただし証拠はない。



#### ⑥普樂寺 1766年(乾隆31年)創建。

- ・乾隆帝は北方および西方の諸部族を平定したのち、それらの諸部族を団結させ、清朝に帰属させ続けるため、宗教政策として、また封建統治強化の活動の場としてこの寺院を建立した。
- ・普樂寺という名前は、乾隆帝自らが、范仲淹の「岳陽樓記」の中の名句から取った。「普天同樂」という意味。
- ・前方部分の建造物は漢族様式。後方部分はチベット様式で、円形の建造物。その内部に立派な立体曼荼羅あり。また歓喜仏が10体ほど展示してある。これらも見の価値あり。
- ・五十嵐本には、「旭光閣内陣中央に高さ1米半ほどの見事な石造須弥壇を設け、その上端周囲に山岳、火焰などの木彫物を置き、中央に四面凸字形をなす木造彩色の異様の壇ともいべきものが置いてある。これ即ち立体曼荼羅であり、曼荼羅を立体に組み立てたものであって、インド・チベット以外に見ることのできない貴重な資料と言われている。ただ惜しむらくはこの立体曼荼羅に安置されてあった、本尊および周囲に置かれてあった仏像、仏具の全部は持ち去られ、どこに何物が安置されてあったか知るべくもなく、今はただ唐金製の歓喜佛が一基置いてあるのみである」と記述。



#### ⑦普陀宗乘之廟 1767年建立開始、1771年(乾隆36年)完成。

- ・普陀宗乘はチベット語の「ポタラ宮」の漢訳である。この廟は「外八廟」中最大であり、チベットのポタラ宮を真似て作ってあるため、「小ポタラ宮」と呼ばれている。
- ・普陀宗乘之廟は、乾隆帝の60歳、皇太后80歳を記念して建造されたものであり、その祝典には蒙古、新疆、青海など各地の少数民族の代表がこぞって参加した。なおこのときトルグート部が帰順してきたので、乾隆帝はこのことを石碑に刻んだ。
- ・普陀宗乘之廟は、一見すると城塞のような建造物であり、五十嵐本では、「普陀宗乘之廟は乾隆帝が、一朝有事に城塞として使用すべき思慮のもとに造営されたのではないかと考えられる」として、多くの根拠を記述している。

#### ⑧広安寺 1772年(乾隆37年)創建。

- ・寺院の痕跡は、現在、人民解放軍の療養所内にあり確認できず。
- ・五十嵐本では、「本寺はチベット様式濃厚な、変わった寺であったようである。今は崩壊せしのみでなく土民により礎石などまで持ち去られ、まったくの廢墟と化している」と記述。

#### ⑨殊像寺 1774年(乾隆39年)創建。

- ・殊像寺は、乾隆家廟と呼ばれ、五台山の殊像寺に似せて作られた。建造物は満族ラマ様式。
- ・五十嵐本では、「他の寺廟の多くがモンゴル・チベットなどの民族を対象として作られたの対して、この殊像寺は満州民族のために経営されたものである。この寺に限り満州人のラマ僧を置いてあったのであるが今なお踏襲されている」と記述。
- ・現在は、未公開で拝観できず。



#### ⑩羅漢堂 1774年(乾隆39年)創建。

- ・浙江省海寧にある安国寺に倣って建てられた漢族様式の寺院。





- ・五十嵐本では、「安国寺の羅漢堂は康熙6年に建立されたもので、この地に行幸された乾隆帝が羅漢像に興味を持たれ、この熱河にそれを模して造られたのである。五百羅漢像は満州国にては、他には見る事ができず、珍しきものとされている。他の寺廟と異なり、民衆の信仰者が多い」、「あまりにも荒廃した堂宇は日に月に危険な状態となりつつあるので、堂内に安置の仏像全部は昭和11年、やむなく普祐寺殿宇に移され安置保護されている」と記述。
- ・現在、羅漢堂の所在地も人民解放軍の療養所内にあるため、確認できず。
- ・現在、羅漢堂周辺は大規模な環境整備中であり、ほとんどの民家が移転済みであったが、小高い山の上に1軒のみが居残っており、強制立ち退きに抵抗している様子だった。その民家で羅漢堂の位置を聞くと、山の下に広がっている軍隊の施設の中を指差し、そこに小さな石碑のみが残っていると教えてくれた。



#### ⑪広縁寺 1780年(乾隆45年)創建。

- ・外八廟中、もともと小さな寺院。普寧寺の駐車場の隣地に位置している。
- ・乾隆帝70歳を記念して建立。
- ・現在、完全な廃寺。寺院内では花の栽培が行われている。



#### ⑫須弥福寿之廟 1780年(乾隆45年)創建。

- ・須弥福寿之廟は、乾隆帝70歳を記念するため、わざわざチベットのシガツェからパンチェン・ラマ6世が、2万キロを歩いてきたことに、乾隆帝が感銘して建立した寺院。シガツェのタシルンポ寺に似せて造った。
- ・多くの少数民族の代表がこの廟に参集し、乾隆帝の長寿を祝った。
- ・その後、パンチェン・ラマ6世は疱瘡のため北京で死亡。

以上

\*\*\*\*\*

## 最近の中国の奇病など

11. SEP. 10

中小企業家同友会上海倶楽部代表

東アジアセンター外部研究員(協力会理事) 小島正憲

私は9/09~11まで、河南省の鄭州市に、富士康集団の新設工場の調査に行く予定だった。しかし8日の晩遅く、わが社の中国人スタッフから、「明日からの鄭州出張は、中止にして欲しい」という緊急電話が入った。理由を問いただしてみると、「最近、河南省で小さな虫に噛まれて死ぬ人が続出している。危険だから絶対に行かないでください」という。そのとき私は、「河南省といっても広いから大丈夫だろう」と思ったが、その中国人スタッフが強硬に主張するので、翌日からの出張を中止にした。

最近、中国では原因不明の奇病が続出している。中国は広大な国であり、つい最近まで「野人の発見」に懸賞金がかかっていたほどの国でもある。少々の奇病が発生しても、驚くほどのことはないかもしれない。しかし SARS のときのように、その奇病が瞬く間に中国全土を恐怖に陥れることもある。警戒するに越したことはないのかもしれない。というわけで今回は、最近、中国で報じられている奇病や伝染病、公害などについてレポートする。

#### 1. 9/08:河南省衛生庁報道、ダニに刺されて死亡。3年間で18人。

- ・河南省南部の信陽市商城県の近辺で、2007年5月から今月までに、ダニに刺されて、全身の倦怠感、頭痛、吐き気と筋肉痛、食欲不振、下痢、高熱などを発症する例が557件に及び、うち18人が死亡した。患者は40~70歳代に多く、5~8月に発病が集中しており、刺されてから約1~2週間後に発病する。
- ・現在、この病気は、ダニに噛まれたことによる、血小板の減少、多臓器不全などに陥る症候群として、「発熱を伴う血小板減少総合症」と暫定的に名付けられ、専門家や関係機関が原因究明と予防などの対策に当たっている。

#### 2. 8月中旬、南京市で、ザリガニを食べて筋肉が溶解する奇病発生。

- ・南京市周辺では、ザリガニ料理が名物となっているが、最近、同市でザリガニを食べて、筋肉の痛みなどを訴える人が相次ぎ、とうとう23人にも及んだ。この病気は筋肉が溶ける「横紋筋融解症」と診断されている。患者は筋肉痛の脱力感、疼痛や麻痺、筋力減退、赤褐色尿などの症状に見舞われるが、死に至ることは少ない。現地では、ザリガニを洗浄する際に使用された蔞酸が残留しており、それが原因ではないかと疑われている。蔞酸で洗うと、ザリガニが鮮やかな赤色になるため、従来からレストランでは使用していたという。ただし確証はつかめていない。
- ・9/07、中国疾病予防制御中心と江蘇省南京市食品安全委員会は、この病気を「患者は淡水魚介類を食べ HAFP 病を発症した」との調査報告を発表した。ただし原因は不明。

#### 3. 8/30、雲南省開遠市で、原因不明の死。家畜なども原因不明の死。近辺は「恐怖の死亡区」と呼ばれる。

- ・8／30、雲南省紅河哈尼族彝族自治州の開遠市小龍潭鎮で、羊の放牧をしていた男性が死亡した。その男性に目立った外傷はなく、しかも盗賊に襲われたような気配もなかった。この近辺では、羊などの家畜などの原因不明の死亡が相次いでおり、地元の住民はこの地区を「恐怖の死亡区」と呼んでいる。
- ・近くの炭鉱からの有毒ガスが原因ではないかと取沙汰されているが、原因不明。

#### 4. 8／16～30、安徽省亳州市蒙城县で、コレラ患者33人発生。

- ・コレラ患者はすでにほとんどが全快したが、県衛生庁は「不潔な食品が原因」として、県内のすべての飲食店に対して、冷たい前菜類を提供することを禁止した。また「食べ物は十分に加熱する、水は沸騰させてから飲む、手洗いを励行する」などの指導を強化している。

#### 5. 赤ちゃんの胸が膨らむ。

- ・前回のレポートでも書いておいたが、いまだに各地で、乳幼児の胸が膨らむなどの早熟問題が発生している。原因は不明。

#### 6. メラミン入りミルク再流通。

- ・2008年度に、三鹿集団が製造した粉ミルクに、メラミンが添加されており、それを飲んだ乳幼児が腎臓結石などになる事件が頻発した。そのとき中国当局はそのメラミン入りミルクの全量回収と廃棄を指示したが、それが徹底されておらず、その粉ミルクが全国各地で再流通していることがわかり、中国当局は8月20日までに、230トンを押収した。
- ・問題の粉ミルクは、他のミルクと混ぜ合わされたり、乳製品の製造に使用されていた。

#### 7. カビ米が銘柄米に変身して流通。

- ・広東省東莞市樟木頭地区の米加工工場では、カビの生えた古米の表面を削り、新米と配合して国産や輸入物の銘柄米として販売している。売れ行きはたいへん好調で、加工待ちのカビ米がまだ100トンもある状態だという。この加工工場の責任者の話しによれば、全国各地にこのような加工工場があり、このような加工は業界で常識的なことで、いずれの加工工場も盛況であるという。

#### 8. 食用油に基準の6倍の発ガン性物質。こっそり自主回収。

- ・湖南省にある食用ツバキ油製造中国最大手の金浩茶油有限公司は、今年3月下旬に自社製品から基準値の6倍の発ガン性物質が検出されたので、自主回収していると発表した。
- ・問題のツバキ油には発ガン性物質が含まれていると、ネット上で告発されていたが、8月21日の時点でも、湖南省品質監察局と金浩社はそれを否定していた。
- ・しかし品質監察局の職員が匿名で、「3月に危険物質が検出されていたにもかかわらず、同局上層部が社会不安を避けるため情報を公開しないと決定した」と内部告発したため、金浩社も事態を公表せざるを得なくなったという。

#### 9. 浙江省余姚市のゴミ捨て場の海水汚染深刻。

- ・余姚市臨山鎮の海辺に不法ゴミ捨て場があり、海水を汚染している。風が吹くと悪臭が漂う。このゴミ捨て場は20年間に渡って使われており、政府はお手上げ状態である。
- ・臨山鎮政府関係者によると、鎮の中の10村のゴミはすべて鎮環境衛生部門が収集し、ここに運んでくるという。このゴミ捨て場は市の認定を受けてはいるが、最終的な承認は受けていない。
- ・鎮には他にもゴミ捨て場があるが、街から遠く離れており運送費がかかること、このゴミ捨て場に捨てることが20年以上の習慣になっていること、これに代わるよい処理方法がないということ、などの理由により不法投棄が続行している。
- ・臨山鎮環境衛生部はゴミをここまで運び、ゴミを消毒し、泥土と碎石で覆い、ごまかし続けてきた。

#### 10. 新型耐性菌が一気に蔓延する可能性。

- ・中国の専門家は、日本や欧州で問題化している抗生物質が効かない新耐性菌(NDM1)が、中国に入ってきた場合、きわめて容易に広まる恐れがあると指摘している。中国の一般大衆がきわめて安易に抗生物質を使ってきたし、病院もそれを容認してきたからだという。また農業や漁業でも、抗生物質が大量に使われているからだとも指摘している。
- ・同時に専門家は、中国人の抗生物質の使用量は、米国人の10倍であり、明らかに乱用であると指摘している。
- ・中国では現在すでに、抗生物質に耐性を持つ「スーパー病原菌」が急増している。これは一般大衆が抗生物質を「万能薬」と思い込み、多用している結果だという。

以上

\*\*\*\*\*

## 中国青年代表団経済班との交流会に関する報告

東アジアセンター事務局担当 王大川

外務省の委託事業である「21世紀東アジア青少年大交流計画」の一環として、中国青年代表団経済界分団（団員70名、メディア関係者7名）が9月10日、京都大学を訪問し、京都大学経済学研究科東アジア



経済研究センター主催の交流会に参加した。

平成19年に日中両国政府が調印した『『中日青少年友好交流年』に関する覚書』に基づき、毎年両国から4000人規模の青年交流プロジェクトが行われ、今回の青年代表団の訪日もその一環で、5月に続き本年度の訪日第2陣となる。代表団は青年指導者、大学生、経済界、科学技術、教育関係、公務員、対日観光関係、医療衛生関係という8つのグループで構成され、グループごとにそれぞれ日本各地を訪問し、関係分野を見学し、関係者と交流を行う。

今回京都大学を訪問した経済界分団は、中国各地から集まる中堅企業の若手経営者70名で構成された。そのメンバーたちは中国経済の将来を担う人材である一方、日中経済交流への寄与も大いに期待される存在と見なされる。今回の京都大学訪問は、代表団側が日本の経営そして環境問題について学術的な視点から理解を深めたいということで、京都大学経済学研究科・東アジア経済研究センターに見学・交流の依頼を提出し、そして東アジア経済研究センターがそれを引き受けたものである。

「日本の企業経営と環境対策」というテーマの交流会は10日午後14時15分から17時30まで法経本館の法経第7教室で開催され、代表団メンバーのほか、日本人学生や留学生たちも参加した。初めに、司会を務める劉徳強東アジア経済研究センター長から開会のことばがあり、続いて田中秀夫経済学研究科長から歓迎の挨拶が述べられた。

《劉センター長の挨拶》

《田中研究科長の開会挨拶》



講演者である末松千尋（京都大学経済学研究科教授）と植田和弘（京都大学経済学研究科教授）の2人の先生は、それぞれ「日本企業からの学習ー京様式企業と東京企業の比較からー」と「環境問題と日本企業・日本経済」をテーマに、日本の経営および環境問題について講演を行い、代表団メンバーからの質問に対し熱心に答え、交流を行った。

代表団のメンバーたちは企業関係者であり、日本の企業経営および環境問題への取り組みに関して非常に興味を持っている。

末松先生は、日本の経営について、企業のイノベーションと内部統制、的確な意思決定という二つの課題を取り上げ、京様式企業と東京企業との比較を行い、モジュールとインターフェイスの導入、KPI (Key Performance Indicator) から KAI (Key Activity Indicator) への展開などを中心に、具体事例を紹介しながら話を進めた。

植田先生は、現在中国で最も関心を集めている環境問題を取り上げ、日本の公害・環境問題の歴史および政治・政策・社会面における環境対策の形成・転換過程を振り返り、日本の経験と教訓を紹介した上で、環境規制をめぐる技術と経済という視角から、公害・環境問題と日本の企業・経済との関係について興味深い事実を指摘した。



《交流会会場の様子》



《末松教授の講演》



《植田教授の講演》

2つの講演内容はいずれも中国経済の現実問題と密接につながるものであるため、代表団メンバーたちも大いに興味を示した。質疑応答時には中国神華集団や北京大象投資会社などの若手経営者たちが積極的に手を上げて質問するなど、活発な意見交換が行われ、交流会は大成功を収めた。

最後に、中国青年代表団の倪健団長（中華全国青年連合会主席補佐）からお礼の言葉をいただいた。



《代表団メンバーからの質問》



《倪健団長の閉会挨拶》

交流会終了後、代表団側の招待に応じて、劉徳強東アジアセンター長・末松千尋教授および学生が、夜の懇親会にも参加し、代表団メンバーたちとさらに交流を深めた。劉センター長は、「大変実りある交流となりました。今後の交流にもつなげていきたいと思います」と述べた。

以上

\*\*\*\*\*

## 【中国経済最新統計】（試行版）

東アジアセンターは、協力会会員を始めとする読者の皆様方へのサービスを充実する一環として、激動する中国経済に関する最新の統計情報を毎週お届けすることになりましたが、今後必要に応じて項目や表示方法などを見直す可能性がありますので、当面、試行版として提供し、引用を差し控えるようよろしくお願いいたします。編集者より

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増 加 率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 <sup>ドル</sup> )	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2008 年												
5 月		16.0	21.6	7.7	25.4	198	28.2	40.7	▲11.0	38.0	18.0	14.9
6 月	10.4	16.0	23.0	7.1	29.5	207	17.2	31.4	▲27.2	14.6	17.3	14.1
7 月		14.7	23.3	6.3	29.2	252	26.7	33.7	▲22.2	38.5	16.3	14.6
8 月		12.8	23.2	4.9	28.1	289	21.0	23.0	▲39.5	39.7	15.9	14.3
9 月	9.9	11.4	23.2	4.6	29.0	294	21.4	21.2	▲40.3	26.0	15.2	14.5
10 月		8.2	22.0	4.0	24.4	353	19.0	15.4	▲26.1	▲0.8	15.0	14.6
11 月		5.4	20.8	2.4	23.8	402	▲2.2	▲18.0	▲38.3	▲36.5	14.7	13.2
12 月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9
2009 年												
1 月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2 月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3 月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4 月		7.3	14.8	▲1.5	30.5	131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0	25.9	27.1
5 月		8.9	15.2	▲1.4	(32.9)	134	▲22.4	▲25.2	▲32.0	▲17.8	25.7	28.0
6 月	7.9	10.7	15.0	▲1.7	35.3	83	▲21.4	▲13.2	▲3.8	▲6.8	28.5	31.9
7 月		10.8	15.2	▲1.8	(32.9)	106	▲23.0	▲14.9	▲21.4	▲35.7	28.4	38.6
8 月		12.3	15.4	▲1.2	(33.0)	157	▲23.4	▲17.0	▲2.05	7.0	28.5	31.6
9 月	8.9	13.9	15.5	▲0.8	(33.4)	129	▲15.2	▲3.5	10.6	18.9	29.3	31.7
10 月		16.1	16.2	▲0.5	(33.1)	240	▲13.8	▲6.4	▲6.2	5.7	29.5	31.7
11 月		19.2	15.8	0.6	(32.1)	191	▲1.2	26.7	10.0	32.0	29.6	34.8
12 月	10.7	18.5	17.5	1.9	(30.5)	184	17.7	55.9	9.7	-44.6	27.6	31.7
2010 年												
1 月				1.5		142	21.0	85.6	24.7	7.8	26.0	29.3
2 月		(20.7)	(17.9)	2.6	(26.6)	76	45.7	44.7	2.5	1.1	25.5	27.2
3 月	11.9	18.1	18.0	2.4	26.3	▲72	24.2	66.4	28.1	12.1	22.5	21.8
4 月		17.8	18.5	2.8	25.4	17	30.4	50.1	21.3	24.7	21.5	22.0
5 月		16.5	18.7	3.1	25.4	195	48.4	48.9	29.3	27.5	21.0	21.5
6 月	10.3	13.7	18.3	2.9	24.9	200	43.9	34.6	8.3	39.6	18.5	18.2
7 月		13.4	17.9	3.3	22.3	287	38.0	23.2	12.8	29.2	17.6	18.4
8 月		13.9	18.4	3.5	23.9	200	34.3	35.5			19.2	18.6

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。  
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、( ) 内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。  
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。  
出所：①—⑤は国家統計局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。